大藏經索引

大正新修

第36冊

讀論類部 一

新文豐出版公司 影印

大正新修 大藏經索引

第三十六冊

續論疏部

一

新文豐出版公司 影印

大正新修 大藏經索引 第36冊 續論疏部一

中華民國81年4月台1版

精1冊基價15.7元

編集者：大藏經學術用語研究會
發行者：高本釗
發行及印刷所：新文豐出版公司

公司：臺北市雙園街96號
電話：3060757·3088624
門市部：臺北市羅斯福路一段20號8樓
電話：3415293·3415294
台北郵政3643信箱
登記證：局版臺業字第0649號
郵政劃撥：0100442 6號

ISBN 957-17-0447-4（套）

ISBN 957-17-0452-0（第三十六冊：精裝）

出 版 說 明

本「大正藏續編索引」第三二至四八册係根據大正新修大藏經續編第五六至八五册所作諸內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學——立正、大谷、大正、龍谷、駒澤、高野山等負責編撰本索引，深獲各界好評，特此推介學林，以公諸讀者。

凡其五五册正編部份所作三一册索引，業於民國六十九年景印刊行，屢經讀者多方詢問：何時得以全部出齊，以利學者應用；經數年來考核評量，並得鄰國日本諒解，爲使此國際性工具書，俾以完整面目提供學者使用，特此全數景印，有了這部索引，任何問題都可以迎刃而解，可知此部索引存在價值是何等珍貴，謹此說明。

本公司編輯部　謹啟壬申年元月

簡介研讀大藏經的工具書

楊白衣

～法寶總目錄與大藏經索引之功用～

研讀大藏經是每一位佛子嚮往的終身大事，不研究則已，若想研究，則非賴特殊工具書莫辦。過去研究佛學，一、靠辭典，二、靠年表，三、靠經書目錄，但這些工具書已無法收到事半功倍之效，勢必另覓他途解決。

日本學者對此提供了最有力的工具書二種，其嘉惠學界之深，誠令吾人嘆爲觀止！此二種工具書，一曰『法寶總目錄』，一曰『大藏經索引』。案此二部書之主要功用如下：

一、法寶總目錄之功用可查下列事項：

㈠知著者而不知其著作。

㈡知經書而不知著者、譯者。

㈢知經書而不知有無異譯本。

㈣知經書而不知何代、何年、何人之著譯。

㈤知經書而不知內容章節。

㈥知經書而不知在何處（第幾册、幾頁）

㈦知經書而不知有無前人之註解。

㈧查著譯者之籍貫、俗姓、生卒年。

㈨查經書之原名、漢譯名、日譯名。

㈩查經書在各種版本之歸屬。

二、大藏經索引之功用有下列事項：

㈠查法相、名數之所在以及定義等。

㈡查人名、地名等所有固有名詞之原名，出現次數以及同名異人。

㈢查某一術語在某一部經書中之用例、定義、異名及在各宗派中之觀點。

㈣查五十種分類項目（詳如下表）之所在以及佛教的人生觀、宇宙觀。

㈤查典籍之解題以及在國際上現今的研究成果。

㈥查每册藏經之詳細內容以及佛教之觀點。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『法寶總目錄』共三巨册，除檢查上述各種要目之外兼有經錄的性質，不但收錄了各版本藏經，如『明藏』、『卍藏』、『卍續藏』等目錄，以及名庫所藏之書目，且有智旭大師的『閱藏知津』與陳實的『大藏一覽集』，可查每一部經律論（一七七三部）之解題、音義、傳記、疏鈔、目錄、纂集、護教、序讚、詩歌等，極爲方便。

『大藏經索引』是根據日本『大正新修大藏經』（中華文化會館及新文豐出版公司影印之大藏經）前五十五册所作之內容索引，這是日本大藏經學術研究會邀請六所佛教大學負責編撰的索引。其索引之計劃工作本以名學者小野玄妙博士（佛書解說大辭典作者）爲中心，從民國三十二年開始著手，並已刊行了阿含部、目錄部、法華部各乙册。這個計劃後來由於博士之逝世和第二次世界大戰之影響而不得不告中斷。直到民國四十五年由大谷大學，高野山大學，駒澤大學、大正大學、立正大學、龍谷大學等六所佛教大學重新提議，計劃把『大正新修大藏經』中之印度、中國、日本等三國選述之部分共計八十五册之內容作成索引四十八册以利學者應用。這六所佛教大學合議之結果，組成大藏經學術用語研究會，對內容的分類項目先行檢討後，決定以下列的原則展開工作。

一、以小野玄妙博士之計劃爲藍本，分爲分類項目別索引、音次索引、字劃索引、四角號碼索引、梵語索引、使其成爲國際性之工具書。

二、用語之選擇，以漢譯大藏經爲準，以總合研究之方法，每頁選出五十個學術用語，而把它配於五十種分類項目。五十種分類項目，以印度撰述部分爲中心，而每項目之下再細分若干細目，其詳目如下：

1.教　說：經典分類名目（三藏、九分教、十二分教等）……a通說　b三藏　c九分教　d十二分教

2.教　判：有關大乘小乘，一乘三乘，密宗及各宗判教之用語……a通說　b大小乘　c一三乘　d各說

3.教　理：表示教理之用語如三法印、空、中、緣起、佛性、如來藏等……a通說　b各說

4.法　相：有關構成宇宙萬象的現象與本體之用語，與五位諸法有關連的名稱……a通說　b色法　c心法　d非色非心法

5.惑　業：有關說明輪迴的惑障，業道之用語（除緣起、因果）……a通說　b惑　c業　d苦

6.行　位：表示修行道位及得果的有關斷惑證理之用語……a通說　b凡夫位　c聲聞緣覺位　d菩薩位

7.戒　律：有關戒律之種類、細目、持犯等之用語……a通說　b各說

8.禪　觀：有關一般禪定、三昧、觀法之用語……a通說　b禪定　c觀法

9.世　界：有關三界、六道等之用語……a通說（包括三界六道，二十五有）b天　c大　d地獄　e餓鬼　f畜生　g阿修羅　h其他

10.佛　：有關佛的德性、身土、佛名、諸尊之用語……a通說　b德性　c佛身　d佛土　e佛名　f諸尊

11.人　名：按照身分分類之固有名詞……a比丘比丘尼　b優婆塞優婆夷　c仙人　d外道　e菩薩　f其他

12.教　派：有關學派、宗派之用語……a學派　b宗派

13.教　團：有關僧伽、教團之法規及僧階之用語……a通說　b法規　c僧階　d其他

14.寺　院：有關寺院之用語……a通說　b各說

15.信　仰：有關各種信仰之用語……a通說　b各種信仰（包括稱名唱題等）

16.儀　禮：有關佛事及僧衆等一般儀式、作法之用語……a通說　b佛事　c作法　d僧衆行儀

17.事　相：有關密宗四度加行、灌頂行法之用語……a通說　b行法　c四度加行　d護摩　e灌頂　f其他

18.曼茶羅：有關密宗行法修行之本尊曼荼羅之用語……a通說　b各說

19.印　契：有關密宗於行法時結印契（手印）之用語……a通說　b各說

20.陀羅尼：有關陀羅尼之用語……a通說　b眞言（純密）　c其他

21.外　教：有關婆羅門教，印度諸學派、儒教、道教、神道之用語……a通說　b婆羅門　c印度諸學派　d儒教　e道教　f神道　g其他

22.咒　術：有關幻化、咒術之用語……a通說　b幻化　c咒術

23.天文曆數：有關天文、時節、方位、算數、度量衡之用語……a通說　b日月星宿　c氣象　d時分　e歲月　f宿曜曆及吉凶日　g方位　h算數　i度量衡

24.地　理：有關地理、地名之用語……a通說　b地名　c山名　d水名　e園林名

25.動　物：有關動物之用語……a通說　b各說

26.植　物：有關植物之用語……a通說　b各說

27.鑛　物：有關鑛物之用語……a通說　b各說

28.物　理：認爲與物理，化學有關之用語……a通說　b色　c形狀　d聲音　e光熱

29.論　理：有關因明，論理學之用語……a因明　b論理。

30.心　　理：認爲與心理學有關之用語

31.倫　　理：有關倫理、道德之用語（例如恩義等）

32.教　　育：有關教育之用語。

33.生理衛生：有關生理與衛生之用語……a通說　b身體　c出生　d生理　e衛生

34.醫術藥學：有關醫術、藥學之用語……a通說　b療法　c病名　d藥

35.民　　族：有關民族、種族之用語……a民族　b種族　c其他

36.社　　會：有關家族、身分、階級等之用語……a通說　b家族　c身分　d階級　e其他

37.政治經濟：有關政治、法制、軍事、經濟之用語……a通說　b行政　c法律　d財政　e軍事

38.產　　業：有關一般職業之用語……a通說　b職業

39.風　　習：有關飲食、衣服、風俗之用語……a通說　b食物　c調味料　d飲料　e衣服　f裁縫　g風俗　h娛樂

40.言　　語：有關語言之種類、文字、文法、翻譯之用語以及梵語，巴利語等之音譯名詞……a通說　b種類　c文字　d文法　e翻譯　f音譯名詞　g其他

41.名　　數：以數目合成之用語

42.典　　籍：有關一般典籍之用語（包括品名）

43.紀　　年：有關年號、干支、王朝等之用語

44.文　　藝：譬喻、因緣、詩頌等與文藝有關之用語……a通說　b本生　c因緣　d譬喻　e文疏　f詩偈

45.音　　樂：有關音樂之用語……a通說　b音聲律呂　c調子　d聲譜　e典目　f樂器。

46.建　　築：有關建築之用語……a通說　b種類　c規構　d技法　e堂舍

47.圖　　像：有關佛、菩薩等的繪畫、彫刻之用語……a通說　b繪畫　c彫刻

48.工　　藝：有關美術工藝之用語……a通說　b題目　c形像　d素材　e技巧

49.器　　物：有關器具、佛具之用語……a通說　b佛具　c器具

50.雜　　語：不屬於上述四十九項目之詞彙

六家大學的分擔情形，到目前爲止已出版者如下：

甲、印度撰述部

索引第一册	阿含部	駒澤大學	大正藏第一、二册
索引第二册	本緣部	高野山大學	大正藏第三、四册
索引第三册	般若部	大正大學	大正藏第五～八册

索引第四册	法華涅槃部	龍谷大學	大正藏第九、第一二册
索引第五册	華嚴部	龍谷大學	大正藏第九、一〇册
索引第六册	寶積部	大谷大學	大正藏第一一、一二册
索引第七册	大集部	龍谷大學	大正藏第一三册
索引第八册	經集部（上）	駒澤大學	大正藏第一四、一五册
索引第九册	經集部（下）	大谷大學	大正藏第一六、一七册
索引第一〇册	密教部（上）	高野山大學	大正藏第一八、一九册
索引第一一册	密教部（下）	大正大學	大正藏第二〇、二一册
索引第一二册	律部（上下）	駒澤大學	大正藏第二二～二四册
索引第一三册	釋經論部中觀部	駒澤大學	大正藏第二五、二六、三〇册
索引第一四册	毘曇部（上）	立正大學	大正藏第二六～二八册
索引第一五册	毘曇部（中）	龍谷大學	大正藏第二六～二八册
索引第一六册	毘曇部（下）	大谷大學	大正藏第二九册
索引第一七册	瑜伽部（上下）	立正大學	大正藏第三〇、三一册
索引第一八册	論集部	龍谷大學	大正藏第三二册

乙、中國選述部

索引第一九册	經疏部㈠	大正大學	大正藏第三三、三四册
索引第二〇册	經疏部㈡	大谷大學	大正藏第三五、三六册
索引第二一册	經疏部㈢	龍谷大學	大正藏第三七、三八册
索引第二二册	經疏部㈣	高野山大學	大正藏第三八、三九册
索引第二三册	律疏部論疏部㈠	龍谷大學	大正藏第四〇、四一册
索引第二四册	論疏部㈡	大谷大學	大正藏第四二～四四册
索引第二五册	諸宗部㈠	立正大學	大正藏第四四、四五册
索引第二六册	諸宗部㈡	大正大學	大正藏第四六、四七册
索引第二七册	諸宗部㈢	駒澤大學	大正藏第四七、四八册
索引第二八册	史傳部（上）	大谷大學	大正藏第四九、五〇册
索引第二九册	史傳部（下）	龍谷大學	大正藏第五一、五二册
索引第三〇册	事彙部外教部	高野山大學	大正藏第五三、五四册
索引第三一册	目錄部	立正大學	大正藏第五五册

丙、日本撰述部

索引第三二册	續經疏部(一)	立正大學	大正藏第五六、五七册
索引第三三册	續經疏部（二上）	高野山大學	大正藏第五八、五九册
索引第三四册	續經疏部（二下）	高野山大學	大正藏第六〇、六一册
索引第三五册	續律疏部	駒澤大學	大正藏第六二册
索引第三六册	續論疏部(一)	大谷大學	大正藏第六三～六五册
索引第三七册	續論疏部（二上）	龍谷大學	大正藏第六五、六六册
索引第三八册	續論疏部（二下）	龍谷大學	大正藏第六六～六八册
索引第三九册	續論疏部(三)	龍谷大學	大正藏第六八～七〇册
索引第四〇册	續諸宗部(一)	立正大學	大正藏第七〇、七一册
索引第四一册	續諸宗部(二)	大谷大學	大正藏第七二～七四册
索引第四二册	續諸宗部（三上）	大正大學	大正藏第七四～七七册
索引第四三册	續諸宗部（三下）	高野山大學	大正藏第七七册
索引第四四册	續諸宗部(四)	高野山大學	大正藏第七八、七九册
索引第四五册	續諸宗部(五)	駒澤大學	大正藏第八〇～八二册
索引第四六册	續諸宗部(六)	大谷大學	大正藏第八三、八四册
索引第四七册	古逸部、疑似部	駒澤大學	大正藏第八五册
索引第四八册	悉曇部	大正大學	大正藏第八四、八五册

本索引之最大特色爲站在最新的研究成果，以梵文、巴利文等音譯，固有名詞爲中心，盡量地附註羅馬字拼音的原文。

『大藏經索引』用途之大，吾人得由五十種分類項目窺見一斑，於此不但可見佛法大海之廣闊無邊，且能證明佛法之多面性格，其內容有人文科學、社會科學、自然科學，應有盡有。以前吾人研究佛學總有望洋興嘆，不知所措之感，現在有了這部索引，任何問題都可迎刃而解，吾人可隨意查閱自己所欲了解之事項。於此不但可查出該用語在大藏經中的所在（頁數），亦可比照各宗派對該問題之看法。不像已往想查尋一個問題往往得花費許多時間，仍無法解決問題，至於想比較研究那就更困難了。例如：有關「業」與「輪迴」之問題來說，可將原始佛教，部派佛教、大乘佛教中較代表性之經論，如：阿含經、俱舍論、成業論、中觀論等之有關「業」與「輪迴」之記載，依索引的指示抄錄出來，然後加以研究原義以及發展的過程。這豈不是輕而易舉之事。在未有索引以前吾人必須讀破整部經典，方能洞悉該問題之所在，而且仍無法收集完整的資料。

又例如吾人想知道佛教對生理衛生的看法，對國家、社會的看法，則可隨便找一本索

引，查閱有關這些問題之所在，然後找某一部經論研讀。這在以前是做夢也想不到的事，由此可知這部索引之存在價值是何等地珍貴了。

總之，研究佛學『法寶總目錄』與『大藏經索引』爲學者不可缺的重要工具書。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

収 録 典 籍 解 題

本書は、大正新脩大藏經第六十三巻（續論疏部一）、第六十四巻（續論疏部二）、第六十五巻（續論疏部三）の一部の索引で、ここには次に掲げる典籍が收録されている。

經典番號	典籍名	撰者
（第63巻）		
No.2249	倶舍論本義抄（四十八巻）	日本　宗　性　撰
No.2250	阿毘達磨倶舍論指要鈔（三十巻）	日本　湛　慧　撰
（第64巻）		
No.2251	阿毘達磨倶舍論法義（三十巻）	日本　快　道　撰
No.2252	阿毘達磨倶舍論稽古（二巻）	日本　法　幢　撰
No.2253	倶舍論頌疏正文（一巻）	日本　源　信　撰
No.2254	倶舍論頌疏抄（二十九巻）	日本　英　憲　撰
（第65巻）		
No.2255	中論疏記（八巻）	日本　安　澄　撰
No.2256	中觀論二十七品別釋（一巻）	日本　快　憲　撰
No.2257	十二門論疏聞思記（一巻）	日本　藏　海　撰
No.2258	掌珍量導（一巻）	日本　秀法師　撰

これら十典籍は、大きく二つに分類される。No.2249～No.2254（第六十三巻・第六十四巻）の倶舍に關したものとNo.2255～No.2258（第六十五巻）の三論に關したものとである。前者は『阿毘達磨倶舍論』及び『倶舍論頌釋疏』の日本撰述の注釋であり、後者は『中論』『十二門論』『掌珍論』の日本撰述の注釋である。以下にそれぞれの典籍について簡單に解説する。

No.2249　『倶舍論本義抄』全四十八巻　宗性撰は、『倶舍論明思抄』ともいわれ、鎌倉時代の南都の佛教を代表する一人である東大寺の宗性が『倶舍論』の本義を逐次、論議の形式で決擇していったものである。宗性（1202～1292）は宮内大輔藤原隆兼の子であり、十

三歳で東大寺に入寺した。彼は初め道性から『倶舎論』を、辯曉から華嚴教學を學んだが、後にさらに興福寺の覺憲の流れを汲む貞慶から因明學を學ぶなど寺の内外を問わず幅廣い學問を習得した。以後、宗性の研究は唯識學、天台教學、佛教の歴史的研究など極めて多方面に亙りそれらの著作も多いが、そのなかでも中心となるのがやはり華嚴教學の研究であろう。彼は主に東大寺の尊勝院に住し、『華嚴經』や『探玄記』や『演義鈔』などを中心に研究し、やがて師の辯曉や道性の後を繼いで華嚴宗の中心人物となる。華嚴教學に關する彼の著作には『華嚴文義抄』『華嚴宗枝葉抄』『華嚴宗香薫抄』などがある。また彼は凝然（1240〜1321）の師としても著名である。凝然は『三國佛法傳通緣起』に於いて師宗性のことを「宗性權僧正は近代の名哲なり。智辯縱横して彌天の德を把ね、論難清雅にして經國の量を播く。華嚴・因明・倶舎・法相皆悉く研究して精詳ならざるはなく、諸宗の奥旨兼暢して遺すことなし。」などと、彼の學識の廣さと深さを賞贊している。このように宗性は華嚴教學を中心としながらも佛教全般に亙って研究を行い、非常に多くの著作をなして正應五年（1292）に九十一歳で亡くなった。宗性は東大寺に入って最初に『倶舎論』を學んでいるが、この典籍に對しては終生大きな關心を持ち續けていたようである。彼の『倶舎論』に關する著作には『倶舎論本義抄』の外に『倶舎論三十講問答記』『倶舎論頌疏三十記』なども現存している。さて『倶舎論本義抄』は、玄奘譯『倶舎論』三十卷のうち破我の一品を除いた二十九卷を順次に卷を追って、各卷の最初に問いをまとめ次にそれらの問いに答えていくという論議の形式によってその本義を決擇したものである。その際『倶舎論』『婆沙論』『順正理論』『倶舎論記』『倶舎論疏』など多くの典籍から本文が抄出されている。問答の數は千七百四十八にも及び、全體で四十八卷の大部なものである。ただ殘念な事に第十六・二十六・二十八・三十四卷の四卷が欠けている（ただし、第十六卷は問いのみ現存）。しかし本書に關しては宗性らの自筆原本や寫本が東大寺に現存しているから、それらの奥書によりその撰述經緯などが知られる。それによれば、本書の撰者は一般に宗性と考えられているが、宗性以外にも數人の撰者が記されている。卽ち各卷の奥書によれば、宗性撰三十一卷、越前得業撰一卷、聖禪撰一卷、圓範撰一卷、撰者不明十卷である。また、撰述の年代も長期間に亙っている。卽ち承久三年（1221）から文永十一年（1274）までの間に撰せられたものである。また本書は第一卷から順次に撰せられたものではなく、各卷の成立年代は前後している。さらに撰述場所も各卷によって相違しており、東大寺にて三十卷、貞慶の墓所である海住山寺にて六卷、中川地藏院にて二卷、場所不明が六卷である。このことは、宗性らが倶舎講や最勝講や春日三十講などの講師を命じられる都度、必要に應じて本書が撰述されていったことを示している。また本書が論議の形式で撰述されていることも注意される。このことは、問答による講義の形式が當時の南都佛教の講義

や學習方法の重要な一部を占めていたことを示しており、本書はその一端を伺わせて興味深いものである。さらに本書の中には隨所に南都の古德の論議が收められており、當時の『倶舍論』に關する論議の様子が伺える。例えば、第二卷抄上に「去る寛喜二年窮冬之候、東大寺東南院に於いて倶舍三十講を行わるるの時、聖禪法師は良忠法師に對して疑問の由。憶念の間、」云々と述べられている。このほか覺澄、義海、貞禪、定緣などの論議も見られる。また先にも述べたように、本書は『倶舍論明思抄』とも呼ばれる。本書第十四卷抄の奥書で「明思之抄」と述べられていることから宗性自身が『明思抄』とも稱したものと思われる。論議という形式の中で多くの典籍から本文を抄出して『倶舍論』の諸問題を逐次明らかにしているのは、著者自身の究學の爲であると同時に、後學に資する爲のことでもあろう。この『明思抄』という名も、後學が本書を一見すれば明確に解釋し得るということからきているのであろう。

№2250　『阿毘達磨倶舍論指要鈔』三十卷　湛慧撰は、江戸時代の淨土宗の學僧湛慧が『倶舍論』を講義する際に撰述した一種の講義のノートであり、『倶舍論』の重要な箇所を選んで注釋を加えたものである。湛慧は諱を信培といい、澄蓮社忍譽と號したと言われる。彼に關しては弟子戒如の筆になる『長時院律法開祖湛慧和上行狀』という傳記が殘されている。それによれば、彼は俗性を谷口氏、母は渡邊氏で延寶三年（1675）に京都三条白河に生まれた。元祿元年（1688）に十四歲で京都華開院の息庵に從って出家した。息庵の法兄聞聽について倶舍・唯識の性相を學んだ。十七歲の時に江戸に行き、靈山寺廓瑩上人に從って宗戒兩脈を相承した。その間佛法の研鑽の傍ら更に東西に諸師を尋ね、荻生徂來・雲竹などにも就いて詩文・書畫なども學んだ。二十五歲の時、息庵上人が病を得たのに伴い、華開院を繼いだ。常に學志を失わず、特に阿毘達磨に關心を持ち、「四阿含」「六足發智」等を初めとして、『解深密經』『華嚴經』『瑜伽論』『攝大乘論』等や、古德先匠の鈔疏など幅廣く學び、また『維摩經』『倶舍論』『成唯識論』『探玄記』等を講じた。正德元年(1711)江戸に行き、その後『起信論義記』を講じて華嚴の鳳潭の『幻虎錄』を反駁し、『五教章』を講じて『匡眞鈔』を反駁し、また湛慧を反駁した天台の靈空の著した『勿字解』に再反駁して『一露濤』を著したことなどは有名である。これらの事實は湛慧の幅廣くて緻密な學風をよく示している。享保八年（1723）四十九歲の時、法席を弟子素寂に讓って隱退し、以後は華美を避け戒を持して自行化他に力を注いだ。增上寺をはじめ、眞言宗智山、豐山、高野山などの招請に應じて經論を講說し、宗内はもとより佛教界全體に大きな信望があった。その中、享保十六年（1731）に高野山の學侶の招請に應じて泉北大寺明王院に於いて『倶舍論』を講じた。この時撰述したものが本書『倶舍論指要鈔』である。翌年には『唯識論述記』を講じ、この時撰述したものが有名な『述記集成編』である。元文五年（1740）

には『雑集論述記』を講じて『雑集論述記貫練編』を撰述した。その間、享保十二年（1727）に師息庵上人の遺命により、洛西の廃寺長時院を復興して律院とし自らが開祖となる。延享四年（1747）、七十二歳で亡くなった。さて『倶舎論指要鈔』は先にも述べたように、泉北大寺明王院に於いて『倶舎論』を講じた時の講義ノートのような形で撰述されたものである。本書の最初の所は『倶舎論』概説のごときものであり、圓暉の『倶舎論頌疏』の六科、卽ち（一）論の緣起、（二）論の宗旨、（三）藏の所攝、（四）論の題號、（五）論の作者、（六）論の譯人、に準據して『倶舎論』の性格や著者世親の解說、漢譯者や注釋書の解說などが述べられている。次いで、『倶舎論』本論から順次重要な語句を直接引いて、それを神泰・普光・法寶の三大注釋書や圓暉の『倶舎論頌疏』などを用いて解說するというやり方で、『倶舎論』全體を簡潔に講述している。本書の構成は『倶舎論』のそれに準據している。卽ち、『倶舎論』の界品から破我品の九品・三十卷とその品・卷の配當が全く相應しており、全體の頁數も兩者はほぼ同じである。從って、『倶舎論』全體に亙る日本撰述の注釋書としては『倶舎論本義抄』や『倶舎論法義』などと比較して相當短いものであり、それだけ簡潔であるといえる。ところで、湛慧は上述の『倶舎論』の諸注釋書以外にも多くの關係典籍を引用して、『倶舎論』を幅廣い關連の中で捉らえている。目についたものを少し列擧してみると、『倶舎論』の末註としては慧暉の『頌疏義鈔』、遁麟の『頌疏記』など、『婆沙論』『順正理論』などの有部論書、『瑜伽論』『成唯識論』や窺基の『成唯識論述記』『義林章』、智周の『成唯識論演秘』など、さらに『智度論』『一切經音義』『阿含經』『涅槃經』など多數である。湛慧は『倶舎論指要鈔』以外にも二・三の『倶舎論』關係の著述を殘している。『倶舎自得集』一卷、『倶舎論懸河錄』一卷が現存している。

№2251 『阿毘達磨倶舎論法義』三十卷　快道撰は、多くの豐山學匠の中で性相學によって著名な快道が自らの廣範な學識を駆使して『倶舎論』の法義を順次に詳しく解說したもので、彼の主著である。快道の傳記には『玉藏院幷びに根生院世代記』や觀藏院墓記銘などがある。それによれば、快道は字は林常と言い、寶曆元年（1751）に上野國勢田郡に生まれた。幼時より學を好み、同地の相應寺住持の快音から句讀を習い、その後同師に從って得度した。長じて豐山に遊學し性相學を研鑽するが、學資に乏しく、傭書筆耕によって衣食の糧を得るなど非常な苦學をしたと傳えられている。途中、快道は『六合釋精義』一卷を著し、豐山能化職の法住の『分別六合釋』を論駁したためその怒りに触れて下山を命じられたが、高野山に登って益々研學に勵んだ。その後東歸して、享和二年（1802）五十二歳の時、浦和玉藏院に住した。しばしば江戸に出て傳通院等に招かれて講席を開き、大いに名聲を博し江戸第一の碩學と稱せられた。文化六年（1809）に湯島根生院に住して法輪を轉じ、翌文化七年（1810）に六十歳で同院にて亡くなった。快道の著述は頗る多く、

その數は百を越している。また内容も廣範囲に亙り、倶舎・因明・六合釋・唯識・天台・密學等に及んでいる。その幾つかを擧げると、倶舎に關しては『倶舎論法義』の外に『倶舎論略法義』『倶舎論玄談』など、因明には『因明疏詳定記』『因明要集記』など、六合釋には『六合釋精義』の他に『六合釋辯誤』『六合釋章疏標目』など、唯識には『觀所緣緣論義疏』『成唯識論述記顯義鈔』など、さらには『金七十論疏』などである。さて『阿毘達磨倶舎論法義』であるが、本書は快道が豐山に於いて撰述したものと考えられる。その奥書等よりみて本書は十數年を費やして完成したものと思われる。天明七年(1787)、快道が三十七歳の時、『倶舎論法義』第一巻が草せられ、また第十二巻が寛政五年に豐山にて加筆され、第二十二巻が寛政十年（1798）に著されたことがそれぞれの奥書により知られる。末後の第三十巻が完成した年は不明であるが、本書はこのように豐山での講義のたびに加筆訂正されながら成立していったものであろう。本書は八門によって『倶舎論』を注釋しており、その構成は非常に整ったものである。八門とは、（一）論起因緣、（二）此論宗趣、（三）解釋題名、（四）分別撰號、（五）料簡譯名、（六）三分差別、（七）品次列位、（八）按文評決であり、最初の七つが序論に當たるものである。この中で本書の特色を示しているのは、（一）、（二）、（六）、（七）、（八）の各門である。（一）では『倶舎論』の所依を經・律・論の三藏とし、小乘の三藏としてそれぞれ關係ある典籍を列擧している。（二）では『倶舎論』の所計部宗は倶舎宗とも經部宗とも言うべきではなく、有部宗とすべきであると言う。（六）（七）では第九破我品の別撰說が詳しく論證されている。今日では學界の常識であるこの說が當時の快道の意識の中で議論の主題とされて詳しく檢討されていることは注目される。（八）は本書の本體であって、『倶舎論』三十巻を逐次評決している。この評決に當たっては、單に普光・法寶などの諸注釋を徒に援用せずに、廣く諸書を參照して特に三藏に依據して論斷している。このことは快道自ら「今辯ずる所の者は、上は四阿含等に登り、中は發智・六足等の諸論に居り、下は正理・顯宗を閲して而して論主の旨を得る。全く光寶等の末師に依らざるは何者ぞ。光寶に依って倶舎を造らざるを以っての故なり」と述べていることからもその自覺の程が伺える。本書のもう一つの特色は、注釋に六合釋が盛んに利用されていることである。卽ち、複合語の文法的解釋が隨所に見られるのである。これは著者の學者的性癖でもあろうが、動植物の名などの非常に細かい博學な說明の仕方などと併せて、いささかペダンティックなきらいがある。しかしいずれにしても彼の『倶舎論』の理解に對する基本的姿勢は壯とするものがあり、本書は特色のある『倶舎論』の注釋書である。またこの『倶舎論法義』三十巻は、同じ快道の『倶舎論略法義』五巻に對して單に『廣法義』とも呼ばれることがあるようである。

№2252　『阿毘達磨倶舎論稽古』二巻　法幢撰は、『倶舎論』に引かれる種々の經說につ

いてその典據を阿含經典の中から刻明に精査したものである。本書の著者である法幢の紀傳についてはあまり詳しいことは明らかではないが、本書の奥書に寶曆癸未の年（寶曆十三年、1763）に世壽二十四才を以て本書を執筆したことが記されており、逆算すると元文五年（1740）の生まれであることになる。出身は美濃國大垣である。また同樣に奥書には本書が高野山金剛峯寺の金剛三昧遍照密院学舎で著わされたことも合わせて記している。本書が著わされた前後の時代は、わが國の佛教研究の歴史の中で極めて異彩を放つ時代であったと言うことができる。卽ち、元祿・享保という革新的な時代の空氣を吸收して、それまでは全く傳統的な教義研究の枠を越えなかった佛教者たちの研究態度が、大きく變化していった時代である。從來の傳統に縛られない彼らの學風は、それまでは全く存在し得なかったような多くの斬新な研究成果を產み出した。鳳潭・普寂・戒定・快道といった人々の著わしたものは全てそうした性格を帶するものである。こうした時代にあって法幢が著わした本書も『俱舍論』研究史上畫期的な意味を持つものである。法幢は、本書を著わすにあたってその動機とも言うべき事柄を卷首に「題言八則」としてまとめている。それによって當時の『俱舍論』研究の錯綜ぶりを窺うことができる。そうした混亂を生ぜしめた理由の主なものとして法幢は次のような點を擧げている。(一)『頌疏』をよりどころとしてきたこと。(二) 四阿含全てを同一部派の傳承と考えてきたこと。(三) 小乘經典は大乘經典に比して使用頻度が少なく、誤りが訂正されることが少なかったこと。(四)阿毘達磨は釋尊の直說ではないとされ、經・律より一段低いものと見做されてきたこと。(五) 玄奘以降みだりに舊譯を斥けてきたこと。これらの誤りをただして、正しく『俱舍論』を理解しなければならないというのが法幢の主張である。兩卷のうち、上卷は界品から業品の途中までを、下卷は業品の續きから破執我品までを收めており、主に『俱舍論』の論文の所說が阿含經典にもとづくものであることを證明しようとしているかのように見受けられる。その註釋態度は極めて簡明であり、說得力に富んでいる。從來の『俱舍論』研究が、光寶二疏をはじめとする末註の羅列によって成り立っていたことを考慮に入れるならば、本書の撰述は全く獨創的なものであると言い得る。そして本書の出現が他の『俱舍論』研究者たちにかなりの影響を與えたであろうことは想像に難くない。例えば、豐山の快道は法幢以後の俱舍學者として最も傑出した人であったと考えられるが、その著『俱舍論法義』には本書を引用して批判を加える所說を散見することができる。『法義』に於いては本書は批判の対象となっているのであるが、しかしながら快道が舊譯をも用いて『俱舍論』を解釋することや末註の援用に賴らない註釋態度などには本書と共通するものがあり、直截に『俱舍論』の本質に迫っていこうとする本書の性格を受け繼ぐものと言うべきである。また本書が著わされてわずか六年後の明和六年（1769）には旣に開板されていることなども

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com